

菊地 琴子

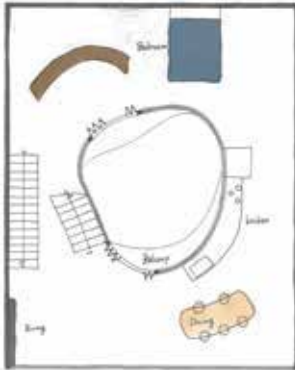
広島女学院大学

【作品名】
トキと生きる

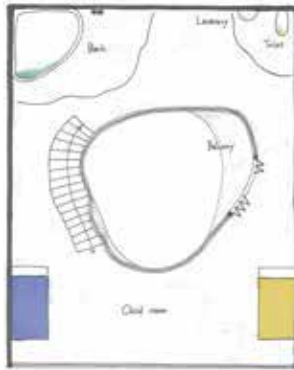
平面図



1F



2F

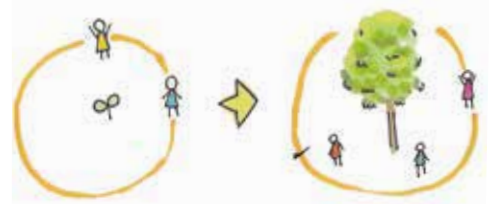


3F

断面図



自分の思い出を飾っていく。



シンボルツリーの成長がトキの経過を感じさせる。

設計コンセプト

成長した子どもは親元を離れて自らの家を持つ。そして親は残された家と子の居ない生活を送る。さらに年月が経つと、家からは住む人がいなくなり住人の声も聞こえなくなる。
現在のこの住宅の在り方を考えたとき、ずっと住み続けたい家にするためには、ここでの生活に愛着を持ってもらうことが重要だと思った。そこで私はこの住宅に、2つの空間を作った。
1つめは、横長の棚に家族の思い出の

ものを歴史の年表のように飾っていく「歴史棚の部屋」である。ここには曾祖父母から祖父母、そして両親の思い出が飾られていく。この部屋で、子どもは祖母から受け継いだ楽器を演奏したり、父のアルバムを見たりと、家族の思い出に触れながら育つ。その続きの棚に、初めて履いた靴や大切な本、発表会のドレスなど自分の思い出を飾っていくことになる。
2つめは、家の成長とともにシンボルツリーも成長していく中庭である。シンボル

ツリーは家の完成と同時に植えられ、家族に大切に育てられる。シンボルツリーは家の中心にあり、どの場所からも見えることによって、ふとした瞬間にシンボルツリーと自分、そして家族の成長を気づかせてくれる大切な存在となる。
そんな温もりのある家で楽しい生活を送り育った子どもたちは、さらに年表の続きを作っていきたいと思うようになる。子どもたちはこの家での生活を続け、この家で親になり、この家で年表の続きを作っていくのである。

審査委員講評

家族の成長の過程や歴史のつくられかた、そしてその理想像などを詰め込んだ空間を示そうとしています。敷地境界に沿った3方向は開口の無い外壁に、そして道路側のみを地域に開放。中央には自由な曲面によるヴォイドを設け、その単純明快な環境装置は、計画の素朴な表現に説得力を感じます。庭の中央に植えられた樹木の成長とともに、家族が収集した生活道具等の蓄積が愉しそうです。